



Vol.16
September 2012

A r t s & C u l t u r e



副学長

宮内博実

Hiromi Miyauchi

センスは色ではじまり、色でおわる

東オホーツクシーニックバイウエーは、広い大地を駆け抜ける喜びと雄大な景観に感動を増進してもらう目的で始まった地域活性化のプロジェクトである。最北の観光立国として、通年で長期滞在を促進するための魅力発見と環境整備が、調査研究の主なテーマである。

流氷が接岸し海と陸とが真っ白な雪と氷でつながる厳冬の光景も、ここ以外では味わえない。中でも最高は、6月初め知床五湖からの眺望である。よく晴れた日の夕方4時過ぎが、なぜか一番美しいと思う。それは夏でも秋でもなく、さらに朝でも昼でもない。どの時間でもそれなりに綺麗に見えるが、景観全体の気持ちのいい「カラーバランス」は、このタイミング以外には考えにくい。

山にはしっかり残雪、さらさら光る柔らかな新緑、初夏の空の青さをそのまま映した鏡のような湖面、やや陰り始めた午後の日差しで山肌にデリケートな陰影がつき、まるでデジタルハイビジョンの様な見事な立体感として眼前に迫ってくる。もともと北海道の大自然の景観は、どこもレベルは高いがここは格別であり、さすが世界遺産である。

景観を色のバランスとして捉える研究は、まだ始まったばかりである。自然景観と人工的な構造物との調和を、実際に色の使い方でもどのようにコントロールするか、これまでの色彩学や土木工学的な技術だけでは、美的感性として対処が難しい。意外にも設計者や管理者の「好き嫌い」で決められていることがほとんどである。

綺麗な景色は、誰もが見ていたいと感じて必ずそこに立ち止る。感動の度合いはそれぞれ違っていても、素直に観た瞬間に心に残る。「綺麗」とか「すばらしい」の一言では言えないくらい的美しさであれば、せめて画像だけでも自分のものにしたいと願う。たとえ自然景観でも、人の手で作られた物であっても同じ気持ちかもしれない。

「感動と出会う旅こそ、その人の感性を育てる」とエアラインのコマーシャルはささやく。「感動」することが「センス」アップにつながるといわれるが、はたしてどこまで本

CONTENTS

巻頭寄稿	1
公開講座紹介	2~3
活動紹介	4~5
インフォメーション	6~8

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター

静岡県浜松市中区中央2丁目1-1 〒430-8533

●Tel:053-457-6113 ●Fax:053-457-6123 ●http://www.suac.ac.jp/

当だろうか。旅さえすればどんどん感性が育つのであれば、旅行会社のスタッフは、さぞかし豊かな感性の持ち主で溢れているはず。

普通に考えると、何にどう感動するかしないかは、本人の自由であり勝手である。いまさら他人から言われたくない。しかし、デザイン教育において、この「感動」するかしないかは、決してどうでもいいことではない。どこをどのような視点から観るのか。どんな印象で、何を素晴らしいと感じるかは、センスを見極める重要なポイントと思う。

素直な感動は、大人になればなるほど他人が強要できないが、ものの見方が少しでも変われば、そこから新たな感動が生まれて、ひいては「感性」が養われるのではないだろうか。多くの感動体験が記憶として、感性「データベース」となって蓄積されて、センス(=感性)に影響を及ぼすようになるのだろう。

色を決めることを仕事として、この40年間何とか続けてこられた。「手拭い」から「都市計画」まで、およそ500品目を超えるアイテムで、誰もが素直に「いい色ですね」と言わせるために多くの時間と労力を費やした。客観的な調査を踏まえた裏付けの作成は勿論、普段から「勘」や「直感」を鍛えることも、脳を刺激し活性化するプロセスとして不可欠である。

色の僅かな違いを正確に見分ける弁別力は、これまでの経験からおおよそ2万色を超えて記憶できるようにトレーニングされている。しかし、色数が増えれば増えるほど、見分ける以上に使いこなす応用力が求められる。具体的な仕事を通じて、その都度、色使いの幅を広げてきたつもりである。しかし、思っている以上に自分の好きな色の範囲から抜け出せないのも事実である。時間がないうちで手っ取り早く決めようとすると、馴染のある同じような色で処理したくなる。それぞれの色の配置、順番、面積比、上下左右の重なり、ほとんどが似てしまう。そこを何とか乗り越えて、コンセプトに相応しいベストな色を創り出してこそプロの「カラープランナー」として認められる。

デザインとアートでは、それなりに色の役割が違うが、その重要度が変わりがない。どちらも見た目の印象は、色の「良し悪し」でほとんどが決まってしまう。絵を描くと本当に感性が養われるのだろうか。絵画体験で美的感性はそれなりに養われるのは事実だが、どのように「センスアップ」として他人から評価されるかは別問題である。それならば美術館で作品鑑賞する程度で、センスアップが出来ないのだろうか。やはり見ない人より沢山観ている人の方がいい。しかし、普段からの美的な暮らしで色の使い方は大きく変わる。日々の暮らしを通じて、美的感動なしでは豊かな感性(色のセンス)は養われないと思う。最後に「センスは色で始まり、色で終わる」と言いたい。

イタリアのデザイン ～魅了する造形美、もの作りの心を探る～

谷川憲司 (デザイン学部生産造形学科)

全5回に渡る公開講座「イタリアの創造力」の第2回として、6月2日にイタリアのデザインを語る機会を得た。私自身イタリアデザインの専門ではないので冷汗三斗の思いであったが、イタリアのデザインを愛する気持ちと、ちょうど30年前にイタリアでデザイン研修に参加したエピソードを交えて講演を行った。受講者は高校生からご年配の方まで幅広い年齢層の方々にお越しいただき盛況であった。講義の骨子を以下に紹介する。

デザインは芸術か！?

日本では、「自分がやりたいように作るのは芸術であり、デザインとは使う人のことを考えて作る。だからデザインと芸術は違う」と私自身叩き込まれた。これに対しイタリアでは画家であり科学者であったレオナルド・ダ・ビンチに象徴されるように、芸術も科学も人生を探求する学問として同様であり、人を科学し喜びを提供するという意味でデザインは芸術そのものだ、と解釈される。デザインの決定に際し、日本では、機能+使いやすさ+売上げ、バランス、経済論が語られるのに対し、イタリアでは、人生の探求+文化の創造、オリジナリティ、人生論が重視される。基本的な視点にイタリアデザインの魅力の原動力があるのではないか。

50's : イタリアデザインの萌芽

イタリアでは50年代にCompasso d'Oro(金のコンパス賞)、ADI(イタリアデザイン協会)を設立してデザイン振興に注力し、戦後の復興、産業の発展をデザインが支えてくれた。自動車のフィアット500、あるいはオリベッティのタイプライター、カッシーナのスーパーレジャエラ(木製の軽量の椅子)などの魅力的なデザインがイタリア製品の世界進出に貢献した。



(私の所有する1959年製アルファロメオ・ジュリエッタを講演会場の階下に展示)

60's - 70's : モダンデザイン黄金期

60年代は活気ある産業を基盤としたモダンデザインの黄金期。家電・家具などにエッソーレ・ソットサス、マリオ・ペリーニ、リチャード・サッパー、ガエターノ・ペッシェなどの工業デザイナーが活躍。自動車ではベルトーネ、ピニンファリナ、イタリアデザインなどのカロッツェリア(ボディメーカー)・デザイン会社が活躍。イタリアのデザイン自体が産業として、世界の製品のデザインに進出。日本の成長を支えたイタリアデザイン

も数多くあり、今見ても新鮮。



80's : 新たなデザイン論の模索

70年代後半のオイルショックを境に成長が止まり、それまでの産業のためのデザインを見直すこととなり、ポスト・インダストリアリゼーション(脱・工業化社会)、人間性回帰を志向するポストモダンなどのコンセプトが生まれ、イタリアデザインの立て直のために、デザインの高度専門教育の必要性が語られていた。

1982年秋にADI主催の国際デザイン研修がナポリ南のマッサ・ルプレンゼで開催され、世界から15人の若手デザイナーが集まった中に、日本から私も参加。エッソーレ・ソットサス、アンドリス・ヴァン・オンク、ガエターノ・ペッシェの3人のトップデザイナー講師陣から、創造への情熱、楽しみながら真剣にデザインする姿勢、問題解決の方法などを学んだ。



(ガエターノ・ペッシェ氏の講義風景)

90's~21世紀 : 時を超えるデザイン

世界産業界の合理化嵐の中で企業形態は変容しているが、イタリアデザインの魂は変わっていない。何より驚くのは、50年代60年代のデザインで、50年以上経った今も現役の製品が多数存在すること。大切に創って作り続ける・大切に使って使い続けるという姿勢、人生の探求、楽しさの創造、人々の心に感動を与える、時を超えるデザインに、これからの時代のヒントがあるのではないだろうか、と結んだ。

番外編

1982年の国際デザイン研修の30年目を記念し、8月に世界各地から同窓生が集まった。このパワーもイタリアデザインのなせる技かもしれない。

公開講座紹介

イタリアの産業と都市

イタリアも、近代から現代にかけて産業革命の影響を受け、近代産業が発展、近代的な都市計画などが展開されました。その中には、古い歴史に勝るとも劣らない、貴重で興味深い材料があります。本稿では、公開講座で取り上げたトピックの中から、工場都市の事例を紹介します。

クレスピ・ダッダは、「アッダ河畔のクレスピ」という意味の都市名です。

19世紀末、欧米では資本主義の下で都市労働者が過酷な環境に追い込まれる中、理想主義的な経営者によりユートピアとしての工場都市が建設されます。工場都市ニュー・ラナーク（2001年ユネスコ世界遺産登録）を建設したイギリスのロバート・オーウェンがその嚆矢とされますが、クレスピ・ダッダ（1995年世界遺産登録）はイタリアの代表事例です。業種は綿紡績と綿織物です。

計画的な都市デザインとしての質も高く、庭付きの労働者住宅群（写真1）や各種福利厚生施設、工場建屋までもがロンバルディア・ネオゴシック様式の美しい意匠です。



写真1 クレスピ・ダッダ眺望（撮影：根本 2006年）

都市建設を推進した創業者の息子シルヴィオ・クレスピは進取の気性に富んだ逸材で、住宅や学校、教会等の施設に加え、最先端の電気設備を備えた労働者病院、イタリアで2番目の水力発電施設、イタリア初の室内温水プール、温水の出る洗濯場、オーウェンに倣った生活協同組合、労働者倶楽部などを建設、楽団やサッカーチーム、女性従業員のための「家政学習コース」などの文化面のソフト施策も充実させました。

背景には、単なる家父長的な労働者への同情心だけではなく「労働者の生活環境を良くすることは、生産性を上げることになる」というシルヴィオの資本家としての信念があります。

シルヴィオは後にイタリアの上院議員になり、サービス残業

根本敏行（文化政策学部長・文化政策学部文化政策学科）

の廃止、女性労働者の待遇改善、児童労働の禁止等々多くの新しい労働関係法の策定に貢献しました。

そして第1次大戦後のウィーン会議ではイタリア全権大使を務め、クレマンソー、西園寺公望と並び次の首相候補と期待され「ムッソリーニの最も恐れた男」と言われました。その後ファシスト政権下で都市は政府系企業に乗っ取られ、失意のうちに世を去りますが、最期まで従業員の雇用維持と幸せな生活を願っていたと伝えられています。

もうひとつの代表例はヴァルダナーニョ（「調和の都市」とも呼ばれる）です。こちらはマルゾット一族による毛織物工場が中心で、今日まで現役で生き残っている貴重な事例です。

19世紀末から既存の古い毛織産業の町に隣接して建設が始まりました。マルゾットの都市建設もまた野心的なもので、各種社会サービス施設として病院、産科病院、保育所、幼稚園、孤児院、療養所（養老院）、学校（小学校、工業学校ほか）等、余暇関連サービス施設として労働者倶楽部、陸上競技場、屋内水泳プール、体育館、屋内馬術場、音楽学校、当時欧州随一の規模の大劇場（地下にアイスホッケーの国際公式試合が開催できるスケートリンクを有する）を建設、主要な建物にはオール・デコの美しいデザインが施されました。最初は水車の水力源だったアーニョ川には水力発電所、対岸には労働者の食料供給のための附属農場（温室、家畜舎等含む）も整備されました。

特筆すべきは病院で、X線研究所、電気療法、マルコーニ療法（電磁波療法）など当時の最先端医療が試みられました。

文化面では、職業訓練校の経営、音楽学校や楽団（写真2）、優れた画家の作品を顕彰する「ルイジ・マルゾット芸術賞」、サッカーチームの創設など、文芸・スポーツ両面の振興に尽くしました。



写真2 ヴァルダナーニョの音楽学校の様子（出典：当時の絵葉書）

映像制作研究プロジェクトの展開

文化・芸術研究センター

文化・芸術研究センター（センター長 三枝成彰）では2011年度より、全学科の有志学生参加による「映像制作研究プロジェクト」を展開している。「プロの製作者の指導の下で、学生が実際に作品を作る経験を積む」というコンセプトの下、映画監督・演出家の三枝健起氏（2012年4月より本学招聘客員教授）を講師として招き、学部・学科を問わず、映像作品の制作を学びたい、制作作業に関わりたい、という学生の自主参画により本プロジェクトは進められている。

映像作品研究とグループによる共同制作を実施（2011年度）

プロジェクト初年度である2011年度は、5月にガイダンスを2度開催、5月16日に第1回の研究会を開き、すべての学科から学部学生約40名が参加した。参加に当り、自分がこれまで親しんできた映像作品や実践的な制作経験、本プロジェクトの中でやってみたいこと、などを簡単にまとめてもらい、グループ編成の参考とした。学生数、学科・学年構成などを考慮して4つのグループを作り、作品制作に向けての活動を開始した。

研究会は月1回のペースで開催され、三枝健起先生よりシナリオや絵コンテの作成法、演出や撮影技法についての講義を受けたり、過去の作品を題材に「カット」の研究を行ったりしながら、グループミーティングを通じて自主制作作品のシナリオ、絵コンテを試作し、三枝先生のアドバイスを受けて修正作業を繰り返すこととなった。

12月からは実際の撮影に入り、ここではプロの映像カメラマンである葛城哲郎氏の指導を頂きながら作業が進められた。映像作品の制作は初めてという学生が多く、寒い中でのロケーションや効果的な演出、編集などの作業は困難を伴うものであったが、2月末までに3本の作品が仕上がりに、3月には学内で上映会を行った。

3本の作品は15～25分程度の短いものであるが、コメディタッチのラブストーリー、学生の日常生活にユニークな登場人物を絡めたもの、ミステリアスな展開の中に家族や友人との温

かい関係が垣間見える作品など、制作時間や機材など制約の多い中、学生らしい感性に満ちた面白い作品が作られ、学生たち自身、制作過程の中で様々なことを学んだものと思われる。

個人制作を実施、“音”の大切さを学ぶ（2012年度前期）

2年目の展開に当たっては、初年度の活動を踏まえ、研究プロジェクトの進め方についていくつかの変更が加えられた。主なポイントは、①参加各学生の「個人制作」の実践を通じた映像制作全般に渡る経験の蓄積、②映像作品における“音”の重要性の認識、の2点である。初年度は当初からグループでの制作を行ったため、多くの学生はシナリオ・絵コンテ作り、撮影、キャスティング、演出、編集など映像制作に関わる作業のうちの一部のみを経験することとなり、経験の蓄積という点で不十分な面があった。また映像作品を作るに当たって、ストーリー展開や映像の“絵”の構成に注意が向けられた結果、“音”への認識が不十分であったことなどを反省材料とした改正点である。

このため2012年度は最初からグループ分けすることはせず、講師から指定された「原作」を題材にした5分程度のショート作品を個人で制作してもらうこととした。「原作」としたのは井伏鱒二作の「点滴」（『井伏鱒二全集 第十三巻』筑摩書房、所収）で、蛇口から滴り落ちる「水滴の音」をテーマとした短編である。

映像化に際しては、まず「点滴」を題材としたストーリー展開を決め、シナリオ、絵コンテを作成、撮影に必要なキャスト、撮影スタッフ等はプロジェクト内のメンバーでの相互支援、または個人の人脉による「調達」とした。ショート作品とはいえ、シナリオ、絵コンテ、キャスティング、撮影、編集など映像制作のすべての過程を統括することで、参加メンバー各自が制作全般に関わる経験を積むことが可能となり、また蛇口から滴り落ちる水滴の音をテーマとすることによって、映像作品における音の重要性を認識してもらう機会を作ることでもできると考えた。

8月上旬までに数名の学生から作品の提出があった。どれも全編5分前後の作品ばかりで、蛇口から水が滴り落ち、容器の水面に接触して音を立てる、という共通のカットはあるものの、ストーリーは自由に展開されており、各学生の個性が垣間見えて、どれも極めて興味深い作品となっている。

2012年度も後期からは前年同様のグループ制作に入る予定であるが、講義の中では演技や音声などについての理解を深めるため、テーマに相応しいゲスト講師の招聘なども予定している。グループ制作のテーマは学生が任意に選ぶ予定であり、15分以内の作品を3本程度作り上げることを目標に、年度末の2～3月頃には学内で2回目の作品発表の場を設けたいと考えている。



映像制作研究プロジェクト 浜松市街地でのロケーション(2012年1月)

活動報告

2012年夏季 手づくり公開工房 開催

2012.8.18・8.19・8.25 自由創造工房 ほか

文化・芸術研究センター

「2012年夏季手づくり公開工房」が8月18日、19日、25日の3日間にわたり開催されました。この講座は毎年、大学の夏休みと春休みの時期に開催されており、高校生以上の一般市民を対象に、学内にある自由創造工房やデッサン室などを使って、「手づくり」の作品製作を、実習を通して学んで頂くものです。毎回の講座には、木材加工、テキスタイル、デッサン等4～5種類の講座が設けられ、本学デザイン学部の教員などを講師に、それぞれ1日あるいは2日の工程で、参加者自らの手づくり作品を完成させていきます。受講生は若年者から高齢者まで幅広く、また遠方からの参加も少なくありません。今回の公開工房では「楽しく木炭デッサンをする（講師：鳥居厚夫）」、「光具vol.20 LEDで光るニッチ（講師：佐藤聖徳）」、

「揺れる彫刻（モビール）（講師：峯郁郎）」「テキスタイル（手織り）（講師：種村興治、桑原壽子）」の4講座が開催され、計26名が受講しました。

各講座では、まず担当の講師から、材料や製作物、製作工程などに関する説明があり、その後、それぞれの作品製作に取り掛かりました。今回、初めての参加という受講生も多く、製作過程ではいろいろと苦労もあったようですが、自分の手で作り上げた作品にはそれぞれ満足感を得られている様子でした。

今後も手づくりの魅力を幅広いみなさんに体験して頂けるよう、「公開工房」の一層の充実に工夫を重ねていきたいと思えます。



テキスタイル



光 具



木炭デッサン



揺れる彫刻



バンバン!ケンバン♪はままつ

室内楽演奏会2012は、大船渡市の音楽活動支援を目的とする初夏と秋の特別公演のほか、10月の「バンバン!ケンバン♪はままつ」(略称「バンケン♪」)を企画しています。この事業とそれに連動する広報プロジェクト「はままつ 音楽の秋6weeks」の活動について、学生代表からの報告です。

小岩信治(文化政策学部芸術文化学科)
「静岡文化芸術大学の室内楽演奏会」監修

「バンケン♪」は鍵盤楽器(キーボード)をテーマにした催しで、2日間でコンサート約40公演が浜松市中心部の12か所、キーボードに関する5つの講演・4つのシンポジウムが本学で行われます。本学が主催する学生主導のイベントで、50名以上がスタッフとして活動しています(総監修:三枝成彰文化・芸術研究センター長)。昨年秋以来、演奏者やシンポジウムの講師、楽器メーカーの皆様へ趣旨を説明して参りました。チラシなどの印刷物はデザイン学部の学生が趣向を凝らして制作しています。

今までの浜松には、このようなイベントはありませんでした。浜松で鍵盤楽器が作られている「土壌」を演奏会とシンポジウムを通して伝えていきたいと考えています。演奏会ではピアノに限らず様々な鍵盤楽器とともに、第一線で活躍する音楽家が登場します。シンポジウムでは主に開発者や研究者が登場します。これまでも、楽器メーカーがデモンストレーションや演奏会を行うことはありましたが、今回のように企業の枠を超えて大学と連携するのは初めてのことで、世界に音楽を発信する「浜松」の価値を再認識できる機会です。企業・団体の宣伝と

してのイベントではなく、文化の歴史や産業史に目を向けて研究・教育活動を展開する本学がこれを実施するところに大きな意義があります。

世界的に「音楽の都」と言われるウィーンは楽器の街でもありました。ベートーヴェンが色々なピアノメーカーとやりとりをしてピアノが改良され、その過程で今日まで演奏され続ける名曲が誕生してきたのです。音楽演奏にたずさわる人びとが自らの芸術表現を磨き、メーカーはそれに応えるように開発していく。その意味で浜松は、改めて強調しなくてもすでに「音楽の都」だと言えるのです。

さて、この秋の浜松の音楽事業を眺め渡すと、11月の国際ピアノコンクールに向かって、今や秋の浜松の風物詩に数えられる「やらまいかミュージックフェスティバル」から、私たちの「バンケン!」、そして伝統ある「ジャズ・ウィーク」と、6週間7つの週末が切れ目なく大型の音楽事業で繋がっています。さまざまな偶然によってこのような日程が生まれた本年、浜松を音楽都市としてアピールする絶好の機会です。これら一連の4事業は音楽創造都市・浜松の魅力を明確に示しており、それらを共同でアピールするべきと考えました。

そこで私たちは、「はままつ音楽の秋6weeks」連絡協議会を本年5月に設立し、上記事業の関係の方々から知恵を集めつつ、浜松のクリエイティブな文化資源である4事業を一体としてPRするプロジェクトを始動しました。「バンケン♪」もこの一環として浜松市内外で広報されます。

荒木菜摘(文化政策学部芸術文化学科3年)



バンバン!ケンバン♪はままつチケット案内

券種		価格
① 1公演券 Pコード: 780-296	一般	800円
	学生	500円
	親子	500円
② シネマイーラ 公演券 Pコード: 177-511	一般	2,000円
	学生	1,000円
	中学生以下	無料(要整理券)
③ 1日フリー 引換券 Pコード: 177-507	一般	3,000円 (当日券 3,500円)
	学生	1,500円 (当日券 2,000円)

- 中学生以下は無料です。
- 学生券は、高校生、大学生、大学院生及び専門学校生が対象です。当日は学生証をご持参ください。
- チケットはいかなる場合(紛失・消失・破損)でも再発行しません。また公演中止の場合以外は払い戻し、お取替えはできません。

浜松市楽器博物館入館には通常料金(大人400円、高校生200円)がかかります。 URL <http://www.gakkihakuhaku.jp/index.html>

インフォメーション

静岡国際オペラコンクールイベント

第4回県民オペラ「夕鶴」全1幕（日本語上演）

静岡国際オペラコンクール実行委員会事務局

日本オペラの不朽の名作『夕鶴』が来年3月10日（日）にアクトシティ浜松で上演されます。このオペラ『夕鶴』は、民話「鶴の恩返し」を木下順二が戯曲化した芝居を團伊玖磨がオペラ化する決意をし、芝居の台詞を一言も変えてはならない、との非常に厳しい条件の下で、約2年がかりでオペラ作曲を進めました。そして、1952年の初演以来、日本で最も上演回数が多い作品であり、国内外で長年愛され続ける日本を代表するオペラとなっています。

今回、主人公の鶴の化身「つう」役に第5回静岡国際オペラコンクールで日本人初の第1位に輝いた光岡暁恵さん、つうの夫「与ひょう」役に浜松市出身のテノール歌手水船桂太郎さんと日本オペラ界を牽引するお2人をお迎えしました。そして、与ひょうをそそのかし、つうに織物を織らせる重要な役どころの村の欲深い男、「運ず」役と「惣ど」役は高田智士さん（富士市出身）、加藤宏隆さん（袋井市出身）がオーディションで選ばれました。その他オーディションで選ばれた静岡県在住の児童合唱、そして地元浜松で活躍の浜松フィルハーモニー管弦楽団と、キャスト・スタッフが力を



オーディション（本学）

集結して県民オペラ『夕鶴』の舞台を創り上げます。

民話という親しみやすい題材による、限りなく美しい旋律と



ポスター題字書道作品表彰式にて



限りなく深い愛情あふれる舞台をぜひご期待ください。

◆県民オペラとは？

県民オペラは、静岡国際オペラコンクール三浦環特別賞受賞者を主演に迎え、出演者、スタッフに多くの県内在住者・出身者が参加して開催するオペラ公演で、これまでに3回上演しました。

◆公演情報

日時 平成25年3月10日（日）
午後2時開演
会場 アクトシティ浜松大ホール

◆チケット情報

9月29日（土）～全国プレイガイドで発売

S指定席	5,000円
A指定席	4,000円
一般自由席	2,000円
学生自由席	1,000円

※学生は大学生以下。
※未就学児入場不可。

◆特別講座情報

- 第1回 平成25年1月12日（土）
講師：二本松康弘
（本学准教授）
語り手：松本なお子
 - 第2回 平成25年2月 3日（日）
講師：伊藤京子（芸術監督）
中村敬一（演出）
 - 第3回 平成25年2月17日（日）
講師：柴田真郁（指揮）
光岡暁恵（つう役）
- ※ 詳細は公式ウェブサイトにて

○平成24年度後期公開講座「文化とデザインの時代Ⅳ～ミュージアムの時代～」

会場 静岡文化芸術大学（南棟2階 279中講義室） 時間 13時30分～15時30分

第1回 9/29(土) 「日本のミュージアムの現状と課題について」 尾野正晴(文化政策学部芸術文化学科)

第2回 10/6(土) 「博物館からエコ・ミュージアムへ」 四方田雅史(文化政策学部文化政策学科)

第3回 10/13(土) 「メディアアートとミュージアム」 的場ひろし(デザイン学部メディア造形学科)

第4回 10/20(土) 「ヨーロッパ型とアメリカ型のミュージアム」 立入正之(文化政策学部芸術文化学科)

第5回 10/27(土) 「ミュージアムの空間とデザイン」 海野敏夫(デザイン学部空間造形学科)

受講料 一般・大学生：3,000円/全5回(1,000円/1回) 高校生・本学学生：無料

○特別公開講座 薪能

第一夜 能講座 10月3日(水) 開場：18時 開演18時30分 会場：静岡文化芸術大学 講堂

第一部 「笛が生みだす伝統の創造と変化」 瀧下真也(芸術文化学科2年)

「海外から見た能・イタリア演劇と能楽」 高田和文(副学長)

「描かれた能」 片桐弥生(文化政策学部芸術文化学科)

第二部 座談会「現代社会と能の身体性」

梅若猶彦(文化政策学部芸術文化学科)、薪能プロジェクトチーム

第二夜 薪能 10月4日(木) 開場：17時 開演18時00分

会場：静岡文化芸術大学 出会いの広場(雨天時 講堂)

狂言「地蔵舞」 仕舞「通盛」「芭蕉」「頼政」 能「玄象」

受講料 一般：3,000円(全席自由) ※第一夜、第二夜の通し券のみ

高校生・本学学生：無料(当日受付)

チケットのお求めは ○チケットぴあ(Pコード：423-167)

全国のチケットぴあのお店、サークルK・サンクス、セブンイレブン

○遠鉄百貨店プレイガイド(053-457-5545)

○アクトシティ浜松チケットセンター(053-451-1130)

お問合せ 静岡文化芸術大学企画室 TEL 053-457-6113

編集後記

秋はイベント、お祭りの季節。2012年10月、本学でも「薪能」と「パンクン♪」がいよいよ本番を迎えます。それぞれの学生スタッフチームは夏休み中も準備に奔走、ここまで忙しい日々を送ってきました。<人は 見えない時間にかがれている(吉野弘「心の四季」より)>本番の成功に向けて濃密な時間を過ごす若い学生たちの姿に“見えない時間にかがれる”確かな人間の成長を認識するのは私だけではないでしょう。さればこそ、若き情熱を傾けたそれぞれのイベントが多くの人びとの支持を受け、実り豊かなものになることを願って止みません。

(St.)

Art & Culture

文化と芸術

文化・芸術研究センター
ニュースレター

Vol.16

September, 2012

発行人：三枝成彰 編集人：富田晋司

発行：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
(事務局 静岡文化芸術大学 企画室)

